

松阪城三の丸五曲口跡発掘調査報告

—— 松 阪 市 殿 町 ——

1 996 · 3

三重県埋蔵文化財センター

序

松阪は、古くから營々と文化を育んできた地域であり、多くの集落跡・古墳・寺跡・中世城館などの遺跡の存在が知られています。最近の発掘調査の成果を見ましても、この地域が伊勢地方において重要な位置を占めていたことを証明しています。

さて、ご存じの通り松阪城は、天正16年(1588)に蒲生氏郷によって築かれた城です。以来松阪は、城下町・商業都市として発展し、三井高利に代表される松阪商人・国学者・本居宣長などの人材を輩出しました。現在の城跡は、本丸跡・二の丸跡の高石垣、御城番屋敷や横垣を巡らせた武家屋敷などが、かろうじて昔の面影をとどめるだけで、『正保城絵図』等に描かれているいくつかの建物・施設等の詳細についてはわからないことが多いのが実情でした。しかし、本丸跡上段については平成元年度～2年度の2カ年にわたって松阪市教育委員会による発掘調査が実施され、天守閣跡の集石・多聞櫓跡の礎石などの遺構・金箔瓦・金銅製六葉金具などの遺物が検出され、大きな成果をあげました。

今回調査しました、松阪市殿町地内にあります松阪城三の丸五曲口跡では、本文中でも述べられておりますように、これまで『正保城絵図』等をもとに推定されておりました松阪城の周囲を巡っていた土塁・水堀の遺構を確認いたしました。調査面積こそ狭かったのですが、松阪城を研究する上で貴重な成果を上げることが出来たと考えております。

調査した場所は、残念ながら寄宿舎の建築によって消滅します。教育環境の充実のための寄宿舎建設も大変重要な事業なのですが、その下にはわたくしたちの祖先が残してきた足跡があり、その足跡なくして今日あるいは未来の発展はありません。その意味からも、この成果を基に、地域の方々・ひいては県民の方々にも文化財保護への关心を持って頂けるのであれば、これに勝る喜びはありません。

調査に際しましては、松阪市在住の皆様方、松阪市教育委員会をはじめ、松阪工業高等学校、県教育委員会総務課の関係各位からは、多大なご協力とともに暖かいご配慮を頂くことが出来ました。調査の成果は、ひとえにこれらの方々の文化財保護への深いご理解のもとにあります。文末とはなりましたが、関係各位の誠意あるご対応に心からお礼を申し上げ、冒頭の挨拶といたします。

1996年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 川村政敬

例　　言

1. 本書は、平成7年度松阪工業高等学校寄宿舎建築工事に伴い発掘調査した、三重県松阪市殿町に所在する松阪城三の丸五曲口跡（旧称松阪城五曲口遺跡）の報告書である。
2. 調査は平成7年度に行った。調査の体制は以下の通りである。

調査主体　　三重県教育委員会
調査担当　　三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）
主事　木野本　和之　技師　伊藤　裕偉
3. 本報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び管理指導課が行い、以下の者が補助した。執筆及び全体の編集は木野本が行い、写真は木野本と伊藤が撮影した。

足立純子、有川芳子、石橋秀美、井田美奈子、井村浩子、柿原清子、川口　愛、楠　純子、倉田由起子、小林佳代子、須賀幸枝、杉原泰子、武村千春、田中美樹、農田幸子、富楽幸子、中川章世、中山豊子、西田衣里、西村秋子、浜崎佳代、早川陽子、堀内博子、松本春美、松月浩子、森島公子、柳田敬子（五十音順）
4. 調査にあたっては、松阪工業高等学校・三重県教育委員会総務課・松阪市教育委員会・㈱伊藤建設・松阪市シルバー人材センター及び地元の方々の御協力を得た。
5. 報告書作成にあたっては、門暉代司氏・福川哲也氏（松阪市教育委員会）、上村安生氏・大川勝宏氏（斎宮歴史博物館）のご教示を得た。また、県生活文化部学事課県史編さん室、松阪市立図書館郷土資料室のご協力を得た。
6. 挿図の方位は、全て真北で示している。なお、磁針方位は西偏6°20'（平成3年）である。
7. 写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らないかぎり縮尺不同である。
8. 本文で用いた遺構表示略記号は、下記による。

S D : 堀、流路　　S Z : 上塁　　S E : 井戸
9. 本書で報告した記録及び遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて管理・保管している。
10. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I	前　　言	1
1.	調査の契機	1
2.	調査の経過及び方法	1
II	位置と環境	2
1.	位置	2
2.	歴史的環境	3
III	調査の成果	6
1.	基本層位及び地形	6
2.	遺構	7
3.	遺物	9
IV	結　　語	10
1.	調査のまとめ	10
2.	松阪城の土星・堀について	12
3.	おわりに	14

挿図目次

第1図	松阪市内の中・近世城館位置図	2
第2図	調査区位置図	4
第3図	調査区地形図	5
第4図	調査区及びトレンチ位置図	6
第5図	遺構実測図	7
第6図	第1・3トレンチ東壁土層断面図	8
第7図	遺物実測図	10
第8図	第九区伊勢国松坂旧城絵図面	11
第9図	松阪城土星・堀復元図	13

表目次

第1表	松阪市内の中・近世城館一覧	3
-----	---------------	---

図版目次

参考資料	松阪城堀の風景	12
図版1	極東米軍機による城周辺の垂直写真	15
図版2	調査前風景・作業風景	16
図版3	第1・3トレンチ東壁土層断面	17
図版4	S E 5・出土遺物	18

I 前 言

1. 調査の契機

三重県立松阪工業高等学校は、明治34年に県下はじめての工業学校として開設された。学校周辺には松阪城跡や御城番屋敷、周囲に横堀を巡らせる旧武家屋敷などもあり、往時の面影を残す静かな環境が保たれている。学校敷地及びその周辺はかつての松阪城三の丸にあたり、現在も「殿町」と呼ばれる。

「嘆鳴寮」は、松阪神社・本居神社が所在する「四五百（よいほ）の森」を隔てた西側に位置する男子生徒用寄宿舎である。以前は、学校敷地内にあったが、飯南女学校廃校後に現在地に移動、そして今日

に至った。しかし、寮の建物は建築されてからかなりの年月を経て老朽化も進み、そこで生活する生徒がかなりの不便を強いられるなど、いくつもの問題が発生していた。このような事情から、教育環境整備の一環として、新「嘆鳴寮」建築工事の早期着工が望まれていた。

そのような状況のなかで、平成7年度事業として新寮建築工事着工の運びとなった。そのため、松阪市殿町「嘆鳴寮」地内の文化財調査が必要となつたのである。

2. 調査の経過・方法

① 調査の経過・方法

今回の事業予定地内は、蒲生氏郷によって築かれた松阪城三の丸内であり、江戸時代に描かれた古図等の史料から、かつて城の南西側で内五曲より通ずる道を開く五曲口門が存在した場所付近であると推定できた。そこで、その範囲を確定するため、平成7年6月に試掘調査を実施した。その結果、事業地内は松阪城五曲口南側の掘及びその隣接地に相当するものと考えられた。その後、業者委託のボーリング調査（掘進長6m）を実施した結果、腐植物の混入する埋め立て土が確認され、事業地は松阪城五曲口南側の掘及びその隣接地と推定されるに至った。

当遺跡の取り扱いについては、その保存も含めて三重県教育委員会総務課および松阪工業高等学校と協議を重ねてきた。しかし、寄宿舎が老朽化し、建替えは必要不可欠であるとの判断から、やむをえず建物部分についてのみ発掘調査を実施し、記録保存することとした。発掘調査は、県教育委員会総務課から執行委任を受け、当センター調査第一課第一係主事木野本和之と技師伊藤裕作が担当した。

調査区は、新寄宿舎の建物部分についてのみとした。東から順に第1～第5の南北方向のトレンチを設定し、遺構が検出されれば拡張していく方法で調査を進めた。但し、建物への影響を考慮して、掘跡

を検出しても全面掘削は行わず、堀跡の範囲確認を中心に調査を行うこととした。

調査に先立ち、寄宿舎建築時の整地土の部分を重機によって除去し、調査開始後は重機及び人力による掘削・検出を行い、排土はダンプカーによって敷地内の堆土場に搬出した。連日の30度を超える厳しい猛暑の中、トレンチの底から湧きだす水に悩まされながらの作業が続いた。

発掘調査は、平成7年8月17日に開始し、同年8月23日に終了した。最終的な調査面積は430m²であった。

② 調査日誌（抄）

- 6月7日 試掘調査（杉谷政樹）。
- 7月3日 ボーリング調査開始（～12日（㈱丸栄調査設計））
- 8月1日 県教委総務課、松阪工業高等学校と現地協議を行い、本調査の範囲を決定する。
(山田猛・杉谷・木野本和之)
- 8月17日 調査開始。第1トレンチの表土を重機で除去、遺構検出を開始。トレンチ北端部分から堀跡と思われる落ち込みを検出。南側の下層から弥生～戦国時代の流路跡を検出。
- 8月18日 午後から第1トレンチ北側を拡張。落ち

込み部分の範囲を確認。
8月21日 第3トレーナーの表土を重機で除去。流路
跡の延長を確認。掘削作業終了。

8月22日 遺構測量（～23日 杉谷・伊藤裕作）。
8月23日 発掘資材の搬出。調査完了。

II. 位置と環境

1. 位 置

松阪市は、南北に長い三重県の中央部にある。東北部は伊勢湾に面した緩やかな海岸線が続き、西部には白猪山を中心とする標高およそ700m前後の山地が広がっている。その間には、三渡川・阪内川・金剛川・揖田川・祓川などの河川によって形成された沖積地が広がっている。北部は一志郡三雲町・嬉野町、西部は飯南郡飯南町、南部は多気郡勢和村・多気町、東部は多気郡明和町に接し、東西22.7km、南北

北15.5kmの広大な市域を有する。

松阪城三の丸五曲口跡は、阪内川右岸の標高35mの独立丘陵を中心とする松阪城跡(1)の南西端、行政的には松阪市殿町に位置する。松阪城の南丘「四五百（よいほ）の森」の南西麓に位置し、丘陵裾との距離は約10mである。調査区のすぐ南を堀痕跡にそつて市道（通称「商業通り」）がはしり、すぐ西で県道松阪環状線（通称「近鉄道路」）と交差する。「伊勢



第1図 松阪市内の中・近世城館位置図 1 : 100,000 (国土地理院「松阪」「二本木」「伊勢」「丹生」1 : 50,000から)

国松坂古城之図」等の史料により、かつてこの付近には土壘・堀・五曲口門が存在したと推定される。五曲の地名は、中世にこの辺りに置かれた神宮領「五勾（ごまがり）御園」に由来する。後に和歌山藩松坂領となった際の開墾により、阪内川左岸が外五

曲、右岸が内五曲となり現在に至る。

松阪市周辺には数多くの遺跡が確認されている。本来ならば、時代順に歴史的環境を述べるべきであるが、ここでは松坂城が築かれる直前の中世後期以降を概観していこうと思う。

2. 歴史的環境

① 伊勢国司北畠氏の支配

後醍醐天皇の建武新政が崩壊する状況のなか、北畠親房は宗良親王を奉じ、息子の顯信とともに伊勢国に向かい南朝方の拠点として丸玉（田丸）城（現度会郡玉城町）を確保した。南伊勢地方が南朝方の重要な拠点となつたため、これ以後この地方の各地で両勢力の戦闘が行われることとなつた。記録によると、延元2（1337）年4月には、東黒部・大口浜（いずれも現松阪市）でも合戦が行われたといふ。松阪は南伊勢地方の玄関口にあたり、軍事・交通上の重要な地域である。そのため、北畠氏と関係の深い城館が多数築かれている（第1図・第1表）。南北朝の早い時期に、南伊勢と後の北畠氏の拠点である多

気（現一志郡美杉村）を結ぶ交通の要衝に坂内城（20）が築かれている。また、多気から伊勢平野に出るための最短ルートの中村川を詫む要衝には阿坂城（4）が築かれた。この城は、中世後期に少なくとも3回の合戦が行われたことが当時の文献史料から読み取ることが出来る。その後、北畠氏は拠点を多気にも移し、その勢力を維持・拡大していく。

永禄10（1567）年、隣国尾張の織田信長が伊勢国攻略を開始し、北畠氏はその本拠地を多気から大河内城（3）に移し臨戦態勢をとつた。永禄12（1569）年、織田軍は大河内城を攻めるが容易に落城せず、結局信長の次男茶筅丸（のちの信雄）が北畠氏の家督を継ぐことを条件に和議を結び、ここに南北朝以来の

No	名 称	所 在 地	地 目	立 地	備 考（遺 繙・規 模・その他の
1	松坂城	殿町	公園	独立丘陵	昭和27年県指定史跡、平成元年～2年木丸跡上段調査
2	松ヶ島城	松ヶ島町字城の麓他	畑、水田	平地	昭和32年県指定史跡、20×30mの台状地
3	大河内城	大河内町字城山	山林	丘陵突端	昭和12年県指定史跡、昭和61年一部調査、360×550m 台状地、堀切
4	阿坂城	阿坂町字舟形他	山林	山頂	昭和12年県指定史跡、180×330m 台状地、土壘、堀切
5	高城城	大河内町字谷	山林	丘陵	昭和57年県指定史跡（阿坂城跡 附）100×140m 削平地、堀切、土壁
6	枳城	小阿坂町字枳	山林	山頂	昭和57年県指定史跡（阿坂城跡 附）80×40m 台状地、堀切
7	岩内城	岩内町字御所ノ谷	山林	山頂	40×40m 台状地
8	伊勢寺城	伊勢寺町字城山	山林	丘陵	35×85m 台状地、堀切
9	岡ノ谷城	西野町字岡ノ谷	山林	丘陵	60×35m 堀切、土壁
10	西野城	西野町字小広	山林	山頂	削平地
11	鷲谷城	大河内町字マヨカ谷	山林	丘陵	140×85m 台状地
12	立野城	立野町字鳥谷	山林	山頂	60×120m 堀切、台状地
13	山惣城	山室町字義藏他	山林	丘陵	40×45m 台状地、堀切
14	船江城	船江町	寺社境内	平地	土壘
15	黒田城	大黒田町	宅地	平地	土壘
16	浅瀬木城	上川町字浅瀬木	山林・畑	丘陵	削平地、土壘
17	神山城	中万字川の上	山林	丘陵	150×120m 台状地、堀切、土壘
18	尾ダケ城	中万字尾ダケ他	山林・畑	丘陵	100×90m 土壘
19	六呂木城	六呂木町字寺境内	山林・畑	丘陵	『勝利五玲遺書』に記載
20	坂内城	坂内町字協谷	山林	山頂	50×55m 台状地、堀切、削平地
21	坂内館	坂内町字御所	校地	山麓	昭和53年11月市指定史跡、地元では「坂内御所」と呼称
22	地原城	袖原町字ヶ原	山林	山頂	昭和53年11月市指定史跡、55×60m 堀切、台状地
23	上山城	御葉生簗町字上山	山林	丘陵	土壘、井戸
24	大石館	大石町字御所屋敷	畑	丘陵	『伊勢国司記略』に記載
25	木本館	小片野町	——	——	『伊勢名勝志』に記載（伝承）
26	霧館	小片野町	——	——	『伊勢名勝志』に記載（伝承）

表1表 松阪市内の中・近世城館一覧

南伊勢の北畠氏支配に終止符が打たれた。

信雄は本拠地を大河内城から田丸城に移したが、天正8年（1580）の田丸城焼失を前に現在の松阪市北部三渡川河口に松ヶ島城（2）を築き、統治の中心とした。しかし、天正10年（1582）信長が本能寺の変に倒れ、羽柴秀吉が天下の実権を握ると、信雄は秀吉と対立し、松ヶ島城は秀吉方によって落城、信雄は伊勢を追われた。かわって、松ヶ島城には近江国日野から蒲生氏郷が入城した。

② 蒲生氏郷の松坂城築城

氏郷は、入城後まもなく南伊勢支配の新たな拠点として「四五百の森」に着目し、新城の築城を開始した。天正16年（1588）には新城に移動し、この地を「松坂」と命名した。

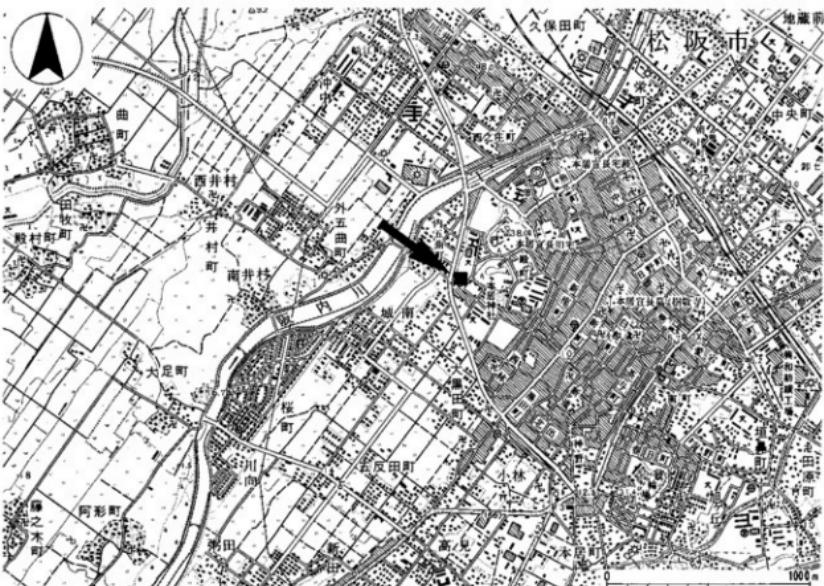
城は、標高約35mの独立丘陵に築かれた平山城で、北を流れる阪内川を防衛ラインとした要害の地に立地する。中心部分の縄張りは、中核部北丘、城の鎮守神を祀る南丘、両丘の周囲の三ノ丸で構成される。北丘は、本丸を中心として東に二ノ丸、南に隠居丸、

西にきたい丸を配し、周囲には堅固な石垣を巡らせている。城の周囲には三ノ丸を取り巻く形で水堀が存在した。城の出入口は、北東の大手口・南東の搦手口・南の同心町口・南西の五曲口の4か所であったとされる。

氏郷は、同時に城下町の建設にも着手し、「町中継」を定め、商業振興政策として楽市の制をとり、さらには松ヶ島城下の町人の「松坂」への移住を促した。また、近江国日野商人や伊勢大湊商人を招致し、参宮街道の城下への付け替え等の方策を積極的にとった。特に商業保護政策は、後の「松坂」商人の基盤をつくることとなった。しかし、天正18年（1590）、氏郷は北条攻めの軍功により会津若松に国替えとなり「松坂」を離れた。

③ 服部・古田氏の時代

天正19年（1591）、豊臣秀次の臣服部一忠が城主となるが、文禄4年（1595）に関白豊臣秀次が謀叛の疑いをかけられ自刃すると一忠もこれに殉じた。かわって古田重勝が城主となり、元和5年（1619）、大



第2図 調査区位置図 1:25,000 (国土地理院「松坂」1:25,000から)

坂夏の陣の軍功により石見国浜田に国替えとなるまで古田氏の時代は続く。なお、文献史料によると、この間も築城は続けられ、古田氏の時代によくやく城は完成したと考えられる。

④ 紀州藩松坂領時代

元和 5 年（1619）、「松坂」は紀州藩領となり以後明治に至るまで勢州領統治の中心として藩の出先機関が集中的に置かれ、「松坂」城代が統治した。この時期、三井高利に代表される「松坂」商人、国学者本居宣長をはじめとする多くの文人墨客を輩出するなど、「松坂」の町は繁栄を極めたといふ。

なお、この頃には天守閣は倒壊していたらしいが、崩れた石垣を直し、堀の土砂浚渫を行うなど、城内の諸施設の補修工事が行われたという記録が残されている。¹⁰

⑤ 明治以降

明治 5 年（1872）には、場内の建物などが売却されることになり、明治 16 年（1883）に公園として一般に開放されるまでには、御城番屋敷に移築された米蔵を除いて、城にあった建物はすべてなくなっていた。土塁と堀は、明治 10 年代には民間に払い下げられ、耕作地として利用された。¹¹ その後、徐々に住宅地となり、昔の面影はない。現在は、江戸時代に描かれた絵図等の史料や堀痕跡の排水路・地割りを比較することでその位置が想定されている。¹²

松坂城跡は、昭和 27 年（1952）に三重県指定史跡に指定され、現在は「松坂公園」として市民の憩いの場として親しまれている。平成元年度と 2 年度には、松阪市教育委員会によって本丸跡上段の発掘調査が行われ、貴重な成果が得られた。¹³



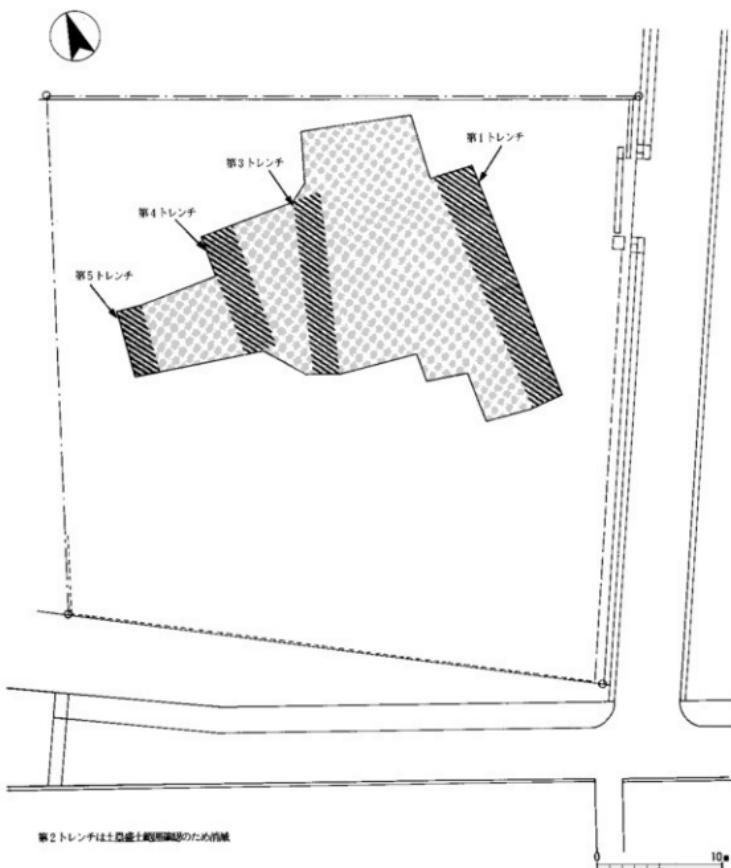
第 3 図 調査区地形図（1 : 5,000）

III. 調査の成果

1. 基本層位及び地形

遺構検出面は、現地表面から約0.7m下の赤褐色砂質土とした。この上部には、旧寄宿舎建設時の整地土と考えられる淡黄灰色砂層、わずかな黒灰色砂質土層が認められ、数cmの碎石を含む表土に至る。下層は河川の堆積土層である。調査区の現況地形は、

ほぼ平らである。わずかに北東～南西方向に傾斜するが、「四五百の森」の丘陵の裾部分にあたるため、本来の傾斜はもっとあったと考えられる。おそらく、築城時の削平や旧寄宿舎建設時の整地等によって現況に変化したのであろう。



第4図 調査区及びトレンチ位置図 (1:400)

2. 遺構

今回の検出遺構は、大きく築城以前（弥生時代～戦国時代）、築城以降（安土桃山時代～江戸時代）のふたつの時期に分けられる。

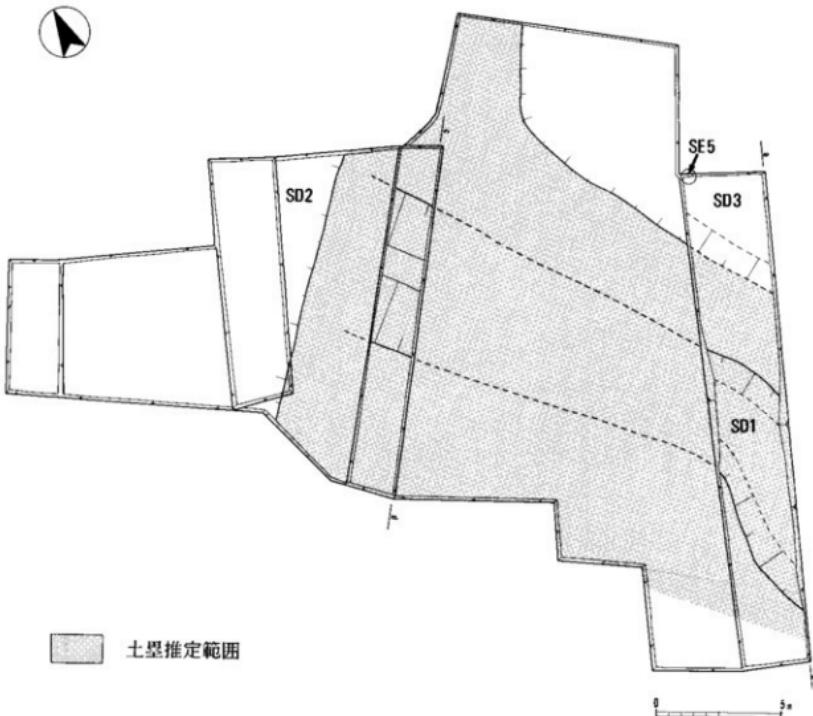
① 築城以前

流路（SD1） 第1・3トレンチ下層で検出した。幅約5m、深さ約0.7mの逆台形で、底部の幅約1mである。第3トレンチ下層でも、その続きを確認している。調査区の南東から、北西の阪内川の方向に流れるものと推測される。完堀できなかつたが、検出した埋土は粘土・シルトを主としており（第6図の36～48）、周辺は沼沢地状を呈していたと想定される。流路は、前述の土層の堆積によって徐々

に浅くなり、中世には完全に埋没している。下層からは、弥生時代～古墳時代の土器片、覆土からは中世の土師器片が出土している。

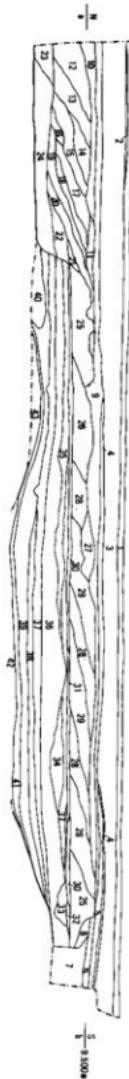
② 築城以降

堀（SD2） 調査区の西寄りの第3トレンチと第4トレンチの間、現地表面の下約1mの地点で南西から北東方向に延びる内側ラインを検出した。外側については調査区外のため、全幅については不明である。埋土は、青灰色砂質土に礫・近世以降の陶器片やガラス片等が混入する。深さについても、全面掘削を行わなかったので不明である。なお、土層断面図（第6図）の7及び47も当初は後世の擾乱と

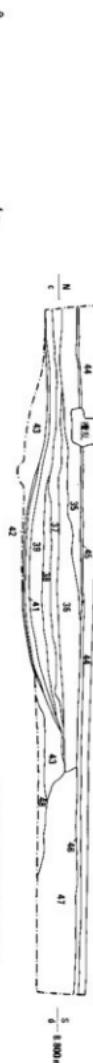


第5図 遺構平面図 (1:200)

10~24HSD9壁上 (Y510~2241壁を削し測定した)
25~26HSD9壁上



第1・トレンチ東壁土層 (a - b 土層)



第3トレンチ東壁土層 (c - d 土層)

- | | | |
|----------------------|--------------------------|--------------------|
| 1 灰土 (砂質) | 17 灰褐色土 | 33 灰灰色砂質シルト粘土 |
| 2 黑褐色砂質土 | 18 灰色、灰褐色ブロック含む粘性土 | 34 黑色ブロック含む淡青灰土砂質土 |
| 3 淡褐色砂質土 | 19 成層砂色 I | 35 淡青灰土砂質シルト |
| 4 黑褐色砂質土 (ガラス等を含む) | 20 灰褐色ブロック含む灰褐色土 | 36 灰褐色粘土 |
| 5 淡褐色砂質土 | 21 灰色土 | 37 灰質含む灰褐色粘土 |
| 6 セメント塊 | 22 灰灰褐色シルト含む淡灰褐色土 | 38 灰青灰色砂質シルト |
| 7 青灰褐色土・赤褐色土混合土 | 23 灰褐色土 | 39 淡青灰色粘土 |
| 8 褐褐色土 | 24 灰灰褐色土 | 40 黄灰褐色 |
| 9 灰褐色砂質土 | 25 灰色ブロック含む淡青灰色砂質土 | 41 灰褐色青灰色土 |
| 10 黑色ブロック含む灰褐色土 | 26 花崗岩母岩ブロック含む褐色土淡青灰色砂質土 | 42 灰褐色土、有機質多い |
| 11 灰灰褐色ブロック含む暗灰褐色土 | 27 小礁、花崗岩ブロック含む淡青灰色砂質土 | 43 黑色粘土 |
| 12 大礁、灰褐色ブロック含む暗灰褐色土 | 28 灰褐色砂質土 | 44 灰色砂質土 |
| 13 苦灰褐色ブロック含む暗灰褐色土 | 29 花崗岩母岩土多く淡青灰色砂質土 | 45 黑灰褐色砂質土 |
| 14 灰褐色アーロック含む暗灰褐色土 | 30 灰褐色砂 | 46 灰褐色砂質土 |
| 15 灰灰褐色アーロック含む暗灰褐色土 | 31 灰褐色砂質土 | 47 淡灰砂質含む淡青灰色土 |
| 16 苦灰褐色アーロック含む暗灰褐色土 | 32 淡灰砂質土 | 48 淡青灰色粘土 |

第6図 第1・第3トレンチ東壁土層断面図 (1:100)

考えたが、その位置から堀埋土の可能性もある。

土壘内側溝（S D 3） 第1トレンチ北側の落ち込み部分である。深さは現地表面から約1.9m、土壘基底部から約1.2mである。幅については、北側が調査区外のため不明である。土層断面図（第6図）からもわかるように、人為的に掘られた溝で、土壘を崩した土層（10~22）によって埋め戻されている。調査当初、この部分を堀であると考えたが、地籍図に現れる堀痕跡ラインと位置がずれること、堀にしては浅いことなどから土壘内側溝と判断した。SD 1の項で述べたような地形条件から、もともと排水の便に恵まれない場所である。さらに、すぐ北側には「四五百の森」の丘陵が迫り、流出する雨水が土壘内側に溜まりやすく、排水のための溝としてSD 3が掘られたのではないかと考える。埋土からは、土師器片、近世以降の陶器片、近世の瓦等が出土している。

土壘基底部（S Z 4） 第1トレンチ東壁土層断面の観察によって確認した。調査当初には、築城時の整地土と考えていた現地表面下約0.7~1.2mに

3. 遺物

出土した遺物は、整理箱に換算してわずか2箱と少量である。いずれも小片で厳密な時期等を判断するのが難しいが、弥生時代から近世以降までの広い範囲にわたっている。すべて第1トレンチからの出土である。以下、出土遺物の概略を記述する。1~7はSD 1埋土から、8~10はSD 3埋土から出土した遺物である（第7図）。

① 弥生時代~古墳時代の遺物

1は壺の口縁部である。内面・外面ともにナデを施し、外面には煤が付着する。口径は、推定で約16cmである。弥生時代後期のものと推定される。

2は高杯である。外面にヘラ磨きを施し4本単位の櫛横線文を2条めぐらせ、3方に透かしを空ける。弥生時代後期~古墳時代初頭のものと推定される。

3も高杯である。内・外面にヘラ磨きを施していくが、外面の磨きは荒い。口径は、推定で約16cmである。弥生時代中期~古墳時代初頭のものと推定される。

ある淡赤色系の土層（25~29）が土壘盛土である。土壘は、築城時に丘陵部分を掘削した際の排土を積み重ねて築かれている。築城前の地形条件から考えて、その方法が最善であったのだろう。南北方向の斜めの土層が、人為的に積み重ねられた痕跡であると考えられる。上部については堀の埋め戻しの際に削平されており、土壘の高さについては不明である。検出した土壘の状況から、南東からのびて来た土壘本体は、堀（SD 2）で北東に折れ曲がり、幅も約6mと細くなると推定される。また、土壘本体の幅は、土層断面図から推定して約14m程になる。

井戸（S E 5） 第1トレンチ北壁直下で検出した。杉板を組み合わせた井筒の上に、井戸枠用に作られたと思われる常滑産陶器の枠をのせる形で検出した。上部の石組みは検出できなかったので、井戸を廃棄した際に取り除かれたようである。SD 3の中にいることから考えて、SD 3が埋め戻された後に掘削されたものであると考えられる。湧水が多く完掘できなかった。直径は、陶製井筒の口径から約0.7m程と推定される。深さについては不明である。

物

4は土師器の碗である。内・外面にヨコナデを施し、口縁部は外反する。口径は、推定で約15cmである。古墳時代中期~後期のものと推定される。

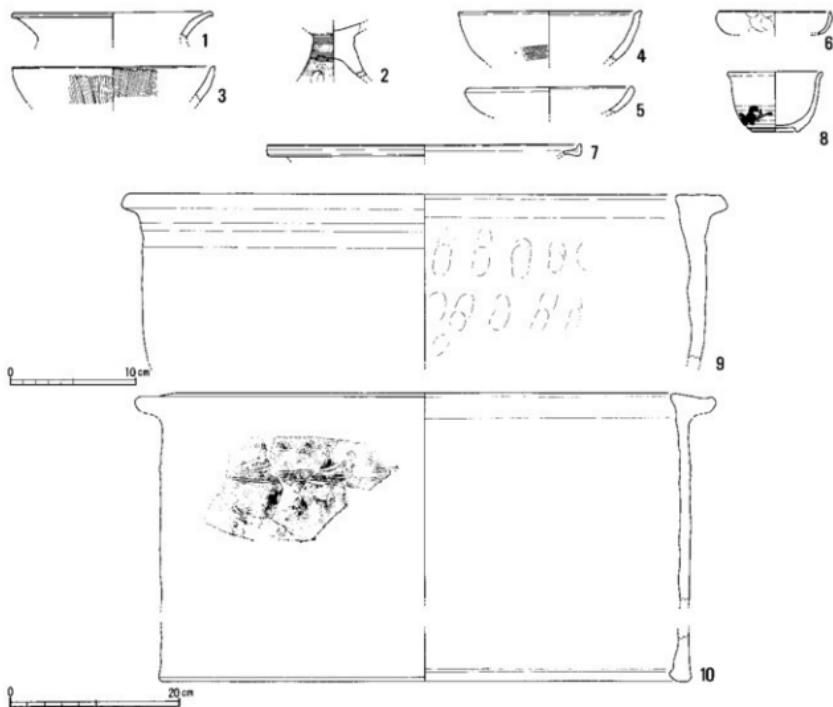
② 中世~近世の遺物

5は土師器の皿である。口縁部はヨコナデを施し肥厚する。口径は推定で約14cmである。12世紀末~13世紀前葉のものと推定される。

6も土師器の皿である。器壁は薄く、口縁部がやや内寄する。口径は推定で約9.2cmである。15世紀後半頃のものと推定される。

7は土師器の鍋である。口縁部に折り返しが見られ、断面は三角形で外面にヨコナデを施す。外面には煤が付着する。口径は、推定で約25cmである。南伊勢系土師器第4段階f型式に相当し、16世紀後半のものである。

8は陶器の碗である。内面に灰白色、外面上半部に褐色の釉を施す。また、外面上半部は染付である。胎土等の特徴から、瀬戸産と考えられる。口径は約8cmで、近世末以降のものである。



第7図 遺物実測図（1～9は1：4、10は1：6）

9は大甕である。口径は推定48.4cm。口縁部の特徴から常滑産大甕偏年のE類に相当し、19世紀前半のものである。¹⁵

10は常滑産陶器の井戸枠である。SE 5の井筒として使用されていた。口縁部の特徴からみて、9と同時期のものであろう。完全に復元出来なかったの

で推定復元をおこなった。高さは不明であるが、口径は推定約70cmである。

その他に、木製桶底部に墨書のあるものや、陶器類・瓦が出土しているが、いずれも明治以降のものと考えられる。

V. 結語

1. 調査のまとめ

今回の調査によって、これまでに推定の域に止まっていた松阪城の土壘・堀の遺構を確認できた。土壘はこれまで想定されているラインを五曲口門に向かい、調査区の辺りでは直角に方向を変え、現在の殿町中学校テニスコート付近で一旦途切れる。また、

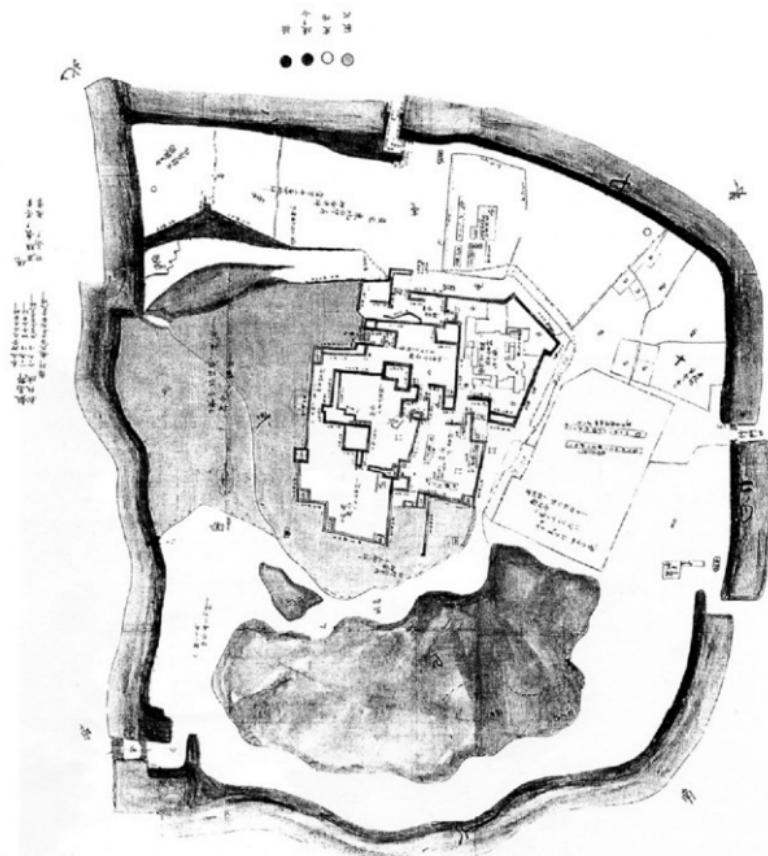
その途中で西向きの張出部分を形成する。同じく壠は想定ラインを五曲口門に向かい、そこでクランク状に屈曲し一旦途切れる。したがって、五曲口門は現在の調査区に隣接する民家と殿町中学校テニスコートの境界線辺りに開口していたと推定できる。

S D I 下層からは弥生時代～古墳時代の土器片が、覆土からは16世紀までの土器片が出土している。S D I 覆土（第6図36）からは、松阪城築城と同時期のものと考えられる南伊勢系の土師器鏡片が出土しているが、中世末までには埋まっていたと考えた方がよさそうである。しかし、堀を掘削するにあたり、この S D I の地形が利用された可能性もある。

遺物については、少量でしかも小片ばかりで、時

期も広範囲にわたっている。ただ、弥生時代～古墳時代の土器については、調査区に接する幸小学校敷地内に弥生時代の遺跡が存在すること、松阪城本丸跡上段発掘調査でも弥生土器が出土していることから、それらとの関係も考えられる。¹⁶

今回の調査は造構の範囲確認が主目的であり、調査面積もわずかで、出土遺物も少なかったことから、多くを語ることは出来ない。しかし、五曲口門付近



第8図 第九区伊勢国松阪旧城絵図面（三重県蔵）

については従来の推定ラインでは間違いないと考えてよさそうである。

ここで、今回の調査で得た反省点について少し述べておきたい。調査当時、今回の調査で判明した堀部分については瓦礫・ガラス片等が多く混入しており、近現代の擾乱による落ち込みであると考えた。逆に、第1トレント北側の落ち込みからの多量の湧水、堀を埋め戻したと推定できる斜めに走る土層か

ら、SD 3が堀に相当すると考えた。しかし、調査終了後に築城以降に描かれた古図・明治時代の地籍図・現在の松阪市都市計画図、さらに調査後の平板測量図・土層断面図等を詳しく検討した結果、本報告書で報告した内容に変更することになった。これは、現存する関係史料、特に古図の検討が不十分であったことに起因する。今後の教訓としたい。

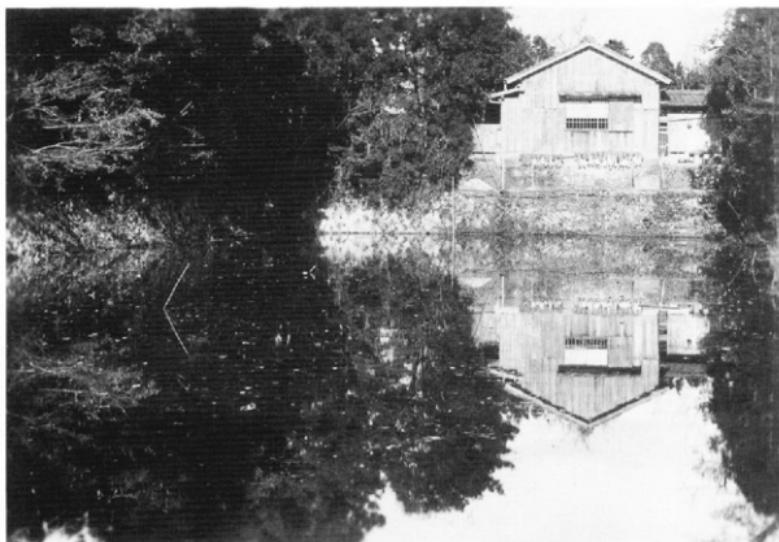
2. 松阪城の土塁・堀について

最後に、松阪城の土塁と堀について若干言及しておきたい。当時の堀は一般に石積みではなく、堀の内側に防護のための土塁を築いたものであった。通常は堀の掘削によって生じた堆土を積み上げて土塁を築くが、遺構の部分で報告したように、調査区付近は丘陵裾を掘削した際の堆土を利用している。

土塁と堀の位置・規模については、『伊勢国松坂古城之図』等の絵図¹⁷、『勢州飯高郡ノ内松坂城町絵図下張¹⁸』の記述によって伝えられている。最後に絵図に現れるのは、明治7年～10年作成の『第九区伊勢国松坂旧城絵図面』(第8図)で、埋め戻される直前の

様子が描かれている。

堀は総延長約2100m、幅16～30m、水深1～3.3m、土塁は下幅7.2m～14.4m、高さ1.5m～6.6mの規模であったという¹⁹。土塁と堀は、全国の城が陸軍省の管轄になったのちに民間に払い下げられた。その後、堀は土塁の土を使って埋め戻され、土塁部分は畑（試作畠）、堀部分は水田（試作田）として利用されたという。以後は徐々に宅地化が進行し、当時の面影はわずかに現在の地割りや排水路に残すのみである。なお、参考までに土塁・堀の想定図を第9図として示した。現存する堀の痕跡は、殿町中学校裏



参考資料 松阪城堀の風景（場所は調査区付近又は現在の市役所付近）松阪市立図書館郷土資料室蔵



第9図 松阪城土堀・堀復元図 (1 : 5,000)

から市営プール横を通り、阪内川に通じる花岡排水溝・松阪工業高校横の神通川・市役所前の排水溝・幸小学校前市道沿いの暗渠等がある。幸小学校前に

は「堀面（ほりめん）地蔵」が祀られ地元の信仰を集めているが、その名からこの辺りに堀が存在したことがしのばれる¹¹。

3. おわりに

今回の調査は、限られた条件の中での調査であり土壌及び堀の全幅、深さ等の詳細は十分に調査されていない。より具体的な結果を得るために今後

さらに十分な調査及び検討を必要とする。なお、今後周辺で行われる発掘調査により、今回の成果を補うような新たな成果が上がることを期待する。

（註）

- 1 「伊勢国松坂古城之図」（『松阪市史』別巻1 松阪地図集成、松阪市、1983年に所収）などがある。
- 2 伊藤良他編著「三重県の地名」（『日本歴史地名体系24』平凡社、1983年）の528頁。
- 3 小林秀「第三章 中世」（『三重県玉城町史』上巻、玉城町、1996年）の603頁。
- 4 註3の文献の604～605頁。
- 5 伊藤裕作「北島氏領域における阿坂城とその周辺」（三重県歴史文化研究会『Miehistory』vol.6、1993年）。
- 6 小玉道明他編「日本城郭大系10三重・奈良・和歌山」（新人物往来社、1980年）の153頁によると、蒲生家が建築なれば「松」の字を吉祥とするといい、秀吉の大坂の「坂」を賜り「松坂」としたという。なお、明治22年4月の市町村制実施の際に現在の「松阪」に変更された。
- 7 門暉代司「松阪城跡」（『三重の近世城郭』三重県埋蔵文化財調査報告65、三重県教育委員会、1986年）。
- 8 「松坂椎嶋雜集」「蒲生飛驒守氏鷲町中流之事」（『松阪市史』第11巻史料編、1983年に所収）。
- 9 註8の文献に、「慶長年中古田兵部重勝再興造営す」と記述がある。また、「きたい丸」の名称は古田重恒の幼名「希代丸」に由来するという。
- 10 「南紀應川史」、『服部家文書』（『松阪市史』第11巻史料編、1983年に所収）等の史料にその記録がみえる。
- 11 埋め立てのはっきりとした時期は、関係書類が焼失しており不明である。しかし、明治5年には陸軍省から城内の建物・竹木・石垣等の入札の達が出されているので、

堀の埋め立てはそれ以降である。また、明治7年～10年作成の「第九区伊勢国松坂旧城絵図面」（三重県所蔵）には埋め立てられる前の堀が描かれている。このことから考えて、少なくとも明治10年までは堀が存在していたと考えて良さそうである。

- 12 註7の文献の36頁で、門氏が絵図・文献等をもとに「松阪城復元図」を作成している。
- 13 西田尚史「松阪城本丸跡上段発掘調査報告書」（松阪市教育委員会、1992年）。
- 14 伊藤裕作「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（三重歴史文化研究会『Miehistory』vol.1、1990年）。
- 15 扇浦正義「常滑大窯の歴年の考察」（『自證院遺跡一新宿区富久小学校改築に伴う緊急発掘調査報告書一』東京都新宿区教育委員会、1987年）。
- 16 「松阪市史」第2巻 史料編考古（松阪市、1978年）の116～118頁。註13の文献の22頁。
- 17 註1の文献に同じ。
- 18 「勢州飯高郡ノ内松坂城町絵図下張」（『松阪市史』第11巻史料編近世1政治 松阪市、1982年に所収）。
- 19 この絵図は三重県所蔵のものであり、今回三重県生活文化部学事課県史編さん室の御好意で掲載することが出来た。
- 20 註7の文献の40頁。
- 21 地元の方の御教示によると地蔵の祠の位置は現在とは異なり、堀の南東角付近にあたる現在のキリスト教会付近にあったそうである。

（参考文献）

- 1 「勢州軍記」（『続群書類從』第二十一輯上合戦部、続群書類從完成会、1931年）。

- 2 松阪市『松阪開府400年史』（1988年）。
- 3 加地宏江「伊勢北畠一族」（新人物往来社、1994年）。

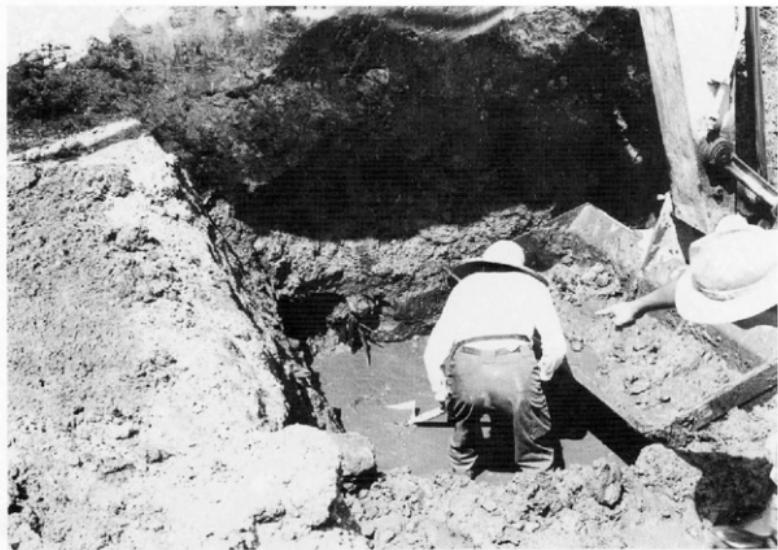


極東米軍機による松阪城周辺の垂直写真（1947年撮影）

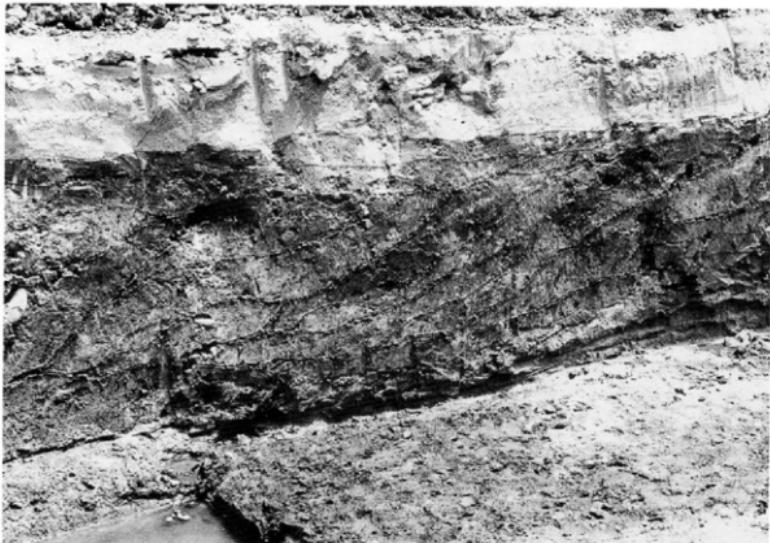
図版2



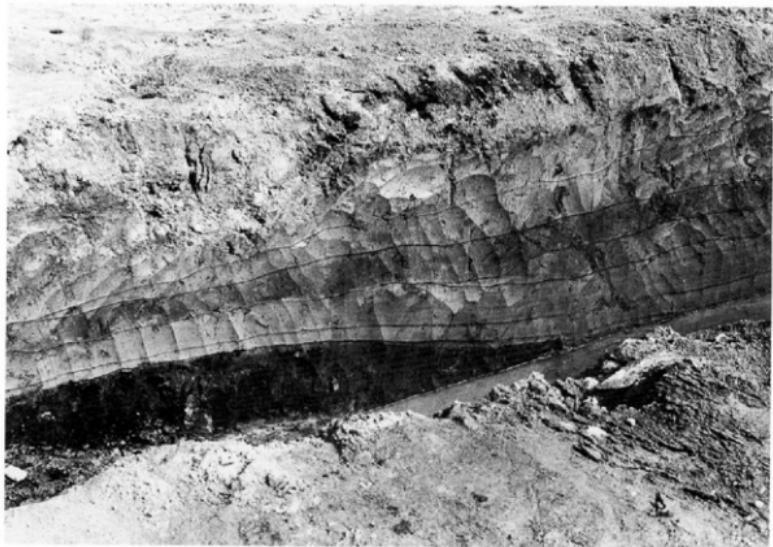
調査前風景（西から）



作業風景



第1トレンチ東壁土層断面

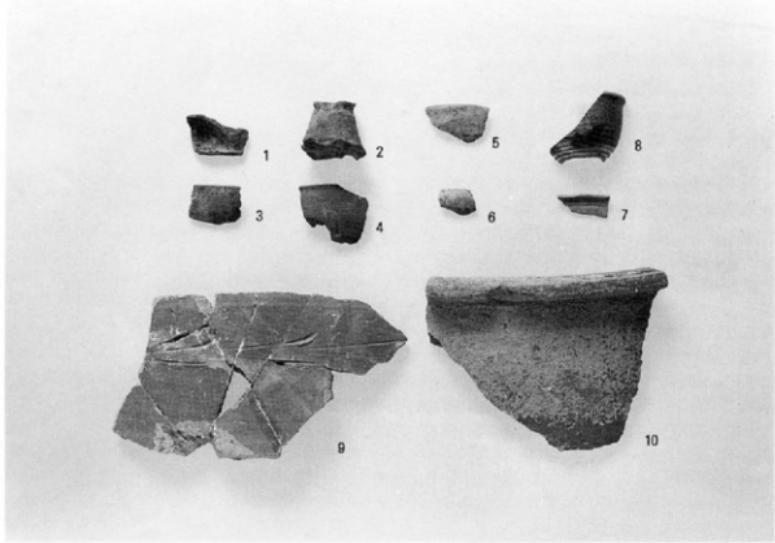


第3トレンチ東壁土層断面

図版4



SE 5 (南から)



出土遺物

報告書抄録

ふりかな	まつさかじょうさんのまるごまがりぐちあと						
書名	松阪城三の丸五曲口跡						
副書名							
卷次							
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	143						
編著者名	木野本和之						
編集機関	三重県埋蔵文化財センター						
所在地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 05965-2-1732						
発行年月日	西暦1996年3月29日						
ふりかな 所収遺跡名	ふりかな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査 期間	調査面積 m ²	調査原因
まつさかじょうさんのまる ごまがりぐちあと 松阪城三の丸 五曲口跡	三重県松阪市殿町	24204		34度 34分 14秒	136度 31分 35秒	19940817 ~ 19940823	430m ² 松阪工業高等学校寄宿舎建築工事に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
まつさかじょうさんのまる ごまがりぐちあと 松阪城三の丸 五曲口跡	城跡	近世	流路 堀 土塁基底部 土壘に伴う溝 井戸	1 1 1 1 1	弥生土器（甕、高杯） 土師器皿、土師器鍋、 陶器甕、陶器椀、瓦		

平成 8(1996) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 6 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 143

松阪城三の丸五曲口跡発掘調査報告

—— 松 阪 市 政 町 ——

1 9 9 6 年 3 月

編 集 三重県埋蔵文化財センター

印 刷 光 出 版 印 刷 株 式 会 社
